

図書館だより



No. 6

平成 26 年 10 月 27 日発行

秋がだんだんと深まりを見せ、紅葉もこれから見ごろを迎えます。芳勝庵の辺りも紅葉が綺麗に色づいてきましたね。

さて、前回の図書館だよりでは、“芸術の秋を楽しもう”と特集を組みましたが、みなさんはどんな秋を楽しんでいますか。外へ出かけたい、紅葉が見たい、ついでに甘いものも食べたい！そんな欲張りな願いを叶えたい人には、庭園散歩をおすすめしたいです。

東京には国指定名勝の庭園が多く存在します。紅葉を楽しむには文京区の六義園(りくぎえん)や国分寺の殿ヶ谷戸(とのがやと)庭園などがおすすめです。名勝とは、景色のすぐれた土地のこと。名勝と呼ばれる庭園の景色を眺めながら秋の散歩を楽しんでください。六義園には池を眺めながらお抹茶と季節の上生菓子を楽しめるお茶屋さんもありますよ。



庭園デビュー*

629-イ 『庭園さんぽ 日本の庭』 インク・インコーポレーション || 著 グラフィック社

日本各地の名庭園が紹介されています。写真と共にそれぞれの庭園の特色や見どころが載っていて、気になった庭園を詳しく知ることができます。鎌倉や京都の寺院の庭園などは、「ここ知っている！」とピンとくる人も多いのではないのでしょうか。

読み始めると、日本の庭園が織り成す四季折々の自然美や枯山水、築山などの造形美に、思わず時間を忘れて魅入ってしまいます。そのくらいに心にグッとくる庭園がたくさんあります。庭園散歩なんて、なんだか渋すぎるなあと思っている人もこの本から、庭園散歩の魅力を感じとって、この秋は庭園を訪れてみてほしいです。

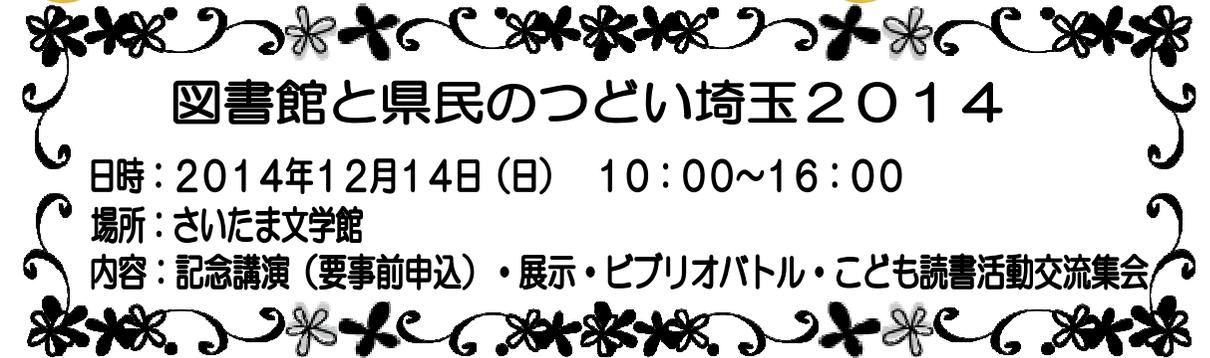
お茶の世界の基礎知識*

791-ク 『茶道の稽古場 役立つ100の知恵』 黒田 宗光 || 著 淡交社

「茶道って興味があるけど、作法が難しそう・・・」と感じている人、まずはこの本でお茶の世界を知ってませんか。

茶の席での作法についてだけでなく、茶道入門に対しての心構え、茶室の作りや方角、使用する道具や茶碗のことなど、茶道に関する多くの知識を得ることができます。ひとつひとつの細かな作法や決まりごとともなぜそうしているのかということまで説明がされているので、納得しながら覚えていくことができます。そして、知れば知るほど、その奥深さにますます興味が湧いてきます。

辻村深月さんに会いに行こう！！



図書館と県民のつどい埼玉2014

日時：2014年12月14日(日) 10:00~16:00

場所：さいたま文学館

内容：記念講演(要事前申込)・展示・ビブリオバトル・こども読書活動交流集会

以上の日程で、今年も「図書館と県民のつどい」が行われます。今回の記念講演は、高校生にも人気の作家 辻村深月さんです！！2004年に『冷たい校舎の時は止まる』で第31回メフィスト賞を受賞し、デビュー。その後も、話題作を次々と執筆し、2011年に『ツナグ』で第32回吉川英治文学新人賞を、2012年には『鍵のない夢を見る』で第147回直木賞を受賞しました。また、今年も『島はぼくらと』が2014年本屋大賞にノミネートされている等、活躍が続いています。

つどいの詳細についてはHPまたは図書館においてあるちらしで確認してください。

B913.6-ツ 『スロウハイツの神様』 辻村 深月 || 著 講談社

脚本家の環、小説家のコーキ、敏腕編集者の黒木、そして、それぞれの夢を追いかけ、制作に励む狩野、正義、すみれ。彼らはスロウハイツに集結し、暮らしている。仲間であり、同志である彼らの特別な絆。その順調に見えた暮らしは新たな入居者の登場で少しずつ変化していく。

章ごとに視点が環だったり、コーキだったり、狩野だったりと変わっていき、彼らが仲間たちにも見せずにいる心情にも触れていきます。夢を追いかけることの楽しさ、苦しさ、支えとなる存在がいることの強さが伝わってきます。小説が誰かを救う。読者が小説家を救う、そんな瞬間に立ち会える物語です。心に残るあたたかさが心地よいです。

913.6-ツ 『本日は大安なり』 辻村 深月 || 著 角川書店

11月22日(日)大安のホテル・アールマティ。同じ日に同じ場所で結婚式を挙げる4組のカップル。それは誰にとっても幸せな門出の日となるはずだったが、新郎、新婦、親族、招待客、ウエディングプランナー、各々が人には言えない驚くような想いを秘めて、この日を迎えていたのだった。祝いの席には似つかわしくない不安がよぎる中、どの結婚式も無事執り行うことができるのだろうか。そして、彼らの心の内は晴れるのだろうか。

何事においても全て良く、成功しないことはないと言われる吉日に起こるラストまでハラハラ・ドキドキが止まらない4つの結婚式にまつわる物語。

📖 読書週間2014 📖

今年も読書週間の季節がやってきました。読書週間は1947年から始まった読書週間は今年で68回目を迎えます。期間は、今日10月27日から11月9日(日)の2週間です。

今年は「めくる めぐる 本の世界」という標語が読書週間の標語に選ばれました。1年に一度訪れるこの機会には、みなさんにいつもよりも本との距離を縮めてみてほしいと思います。

最近では書店でも様々なイベントが行われており、ジュンク堂書店プレスセンターでは11月1日～2日に一泊二日で「ジュンク堂に住んでみる」という本好きにはたまらない企画が行われます。また、ブックカフェという新しい感覚で本を楽しめる空間があったり、街の図書館も地域のニーズに合わせて進化していたり、本と出会う場がとても充実しています。そうした場に自ら飛び込んでいって、ふいに惹かれる本と出会えたら、とても素敵だなと思いますし、そこで出会った本はきっと自分にとって特別な1冊となります。本がある“場”も楽しみながら、ゆっくり自分で見つける自分のための本を見つけてみてください。



ブックディレクションは、常に現場との関係の中で形作られていく*

024-タ『本の声を探し ブックディレクター 幅允孝の仕事』 高瀬 毅 || 著 文藝春秋

みなさんがよく利用する図書館と本屋さんでは、なんとなく本の並べ方が違うのを感じていませんか？ 図書館はNDC(日本十進分類法)に基づいて本を並べ、本屋さんではお客さんの層に沿ったテーマ、ビジネスとか家庭という風を集めているからです。この本で紹介されている幅さんは、ブックカフェや病院図書館などから依頼を受け、それぞれにあった本を選び、棚を作ります。それは今までとは全く違う手法です。例えば映画『すべては海になる』のセットで、主人公の書店員が作る設定の「愛」の本のコーナーは、『OUT』『夜と霧』『シトーン動物記』と一見関係ない本を組合せながら、全体で愛の世界を表現します。本の持つ深い可能性。さあ、本は読まれるのを待っていますよ。

ブックカフェめぐりませんか*

673-ケ『TOKYOブックカフェ紀行』 玄光社

本に囲まれた空間でお茶をいただく。それは至福のひとつであり、そんな憧れのシチュエーションを叶えてくれるのがブックカフェです。近年はその数も増え、気軽に足を運ぶことができるようになりました。お店によってその雰囲気は様々！ 硬派な純文学が揃っていたり、旅をテーマにしていたり、海外20カ国の絵本が読めたり、お店ごとに選書へのこだわりがみられて楽しいですし、一流ホテルのラウンジのようだったり、隠れ家的だったり、文学作品に登場した食事があったり、空間やカフェメニューも魅力がいっぱいです。「ここ行ってみたいな、こっちは楽しそうだな」と読んでいだけで、心がウキウキと弾んできます。一度行ったら、やみつきになりそう！

💖 女性力を上げる 💖

女性の活躍がめざましい今日、政界、スポーツ界、芸能界など各界で女性の活躍が注目されています。また「女子力」、「女性力」という言葉が様々なシーンで使われるのを耳にするようになりました。みなさんも秋草の三年間の高校生活を通して、まさに女性力を磨き上げているまっただ中であります。

そこで、今年読書週間では「女子力を上げる」と題し、より素敵な女性へと成長していくためにきっと役立つであろう本を紹介いたします。みなさんの成長を図書館も応援します。

🧵 基礎を身につける 🧵

きちんとお裁縫できますか*

593-セ『さいほうの基本』 角川SSコミュニケーションズ

スカートの裾がほつれた時、ブラウスのボタンが取れた時、みなさんはサッとそれらを繕うことができるでしょうか。手縫いの経験はもちろんあっても、いざ縫おうとした時に縫い方に少し不安が残ったりはしませんか。さらにミシンでのお裁縫となると、その不安は大きくなります。今の内からしっかりと不安をなくすためのおさらいをして、スマートに縫い物のできる女性を目指しましょう。

本の前半部分では、ひとつひとつの行程をカラーの写真つきでわかりやすく、丁寧に説明してくれています。そして、後半部分では、簡単に作れるエプロンやさりげなくおしゃれなエコバッグなどの作り方なども紹介されているので、単にやり方を読んで確認するだけでなく、確認した後は実際に手を動かして覚えてみましょう。

プロに学ぶ料理の基本*

596-オ『女子栄養大学のお料理入門』 小川 久恵 || 著 女子栄養大学出版部

お裁縫と同じくらい身につけておきたいのがお料理の腕。基礎ができるようになっていけば、自然と自分でアレンジをきかせて、料理の幅を広げていくことができます。

まずは火加減、水加減、混ぜ方、切り方から始まり、食材の下準備の仕方、そして、それらをいざ実践するためのレシピが載っています。お料理は何となくで出来てしまう部分もありますが、こうして改めて手順を読んでも、「こうしたほうがおいしくなるのか」という発見がたくさんあり、普段から料理をこなしている人が読んでもおもしろいと感じると思います。また、載っているレシピは基本を学ぶという目的があるだけでなく、純粋に「おいしそうだから作ってみたい」と思わせるおいしそうな料理が揃っています。この1冊で毎日の食卓が賑わうこと間違いなしです。



暮らしの中の女性力

モノを大切にできる人になる*

590-ア 『新品みたいに長持ち！お手入れの教科書』 安部 絢子 || 著 PHP研究所

手軽にモノが手に入る時代に私たちは暮らしていますが、モノに対する感謝の気持ちをいつもまでも忘れない人になりたいものです。「傷んでしまったら、汚れてしまったら、おしまい」にするのではなく、傷まないように手入れをしたり、汚れたらすぐに落としてあげるように、そうやって日頃から大切に扱っていけば、モノの寿命は伸び、より長く愛用していくことができるのです。

やり方がわからないから放っておくのではなく、この本でそれぞれのモノがどのようなケアを必要としているのかを覚えていきましょう。お洗濯の仕方や食器の洗い方ひとつをとってみても、モノによって洗いがこんなにも違うのだと知り、日頃からもっとモノを大切に意識していかななくてはならないと気づかされます。

整理整頓ができるとその人も輝く*

597-ユ-2 『人生がときめく片づけの魔法2』 近藤 麻理恵 || 著 サンマーク出版

2010年に出版され話題を呼んだ「人生がときめく片づけの魔法」の第2弾です。前は“一度片づけたら、絶対元に戻らない方法”が伝授されましたが、今回は“片付ける気持ちはあるけれど、まだ片づけを終えていない人”のために「片づけを完璧に終わらせる方法」を伝授してくれています。

片づけを“片づけ祭り”と呼び、ときめきランキングづけ、「使い道のなさそうなきめくモノたち」の活用方法など、片づけしようかなと思わせる片づけ法がいくつも紹介されています。それに加え、衣類のたたみ方や収納スペースの有効活用など、知っておくべき基本にもしっかり触れられています。

「まさに私が読む本だ」と思った人、“片づけはけっして嘘をつかない”という言葉信じて、今すぐ片づけ祭りを始めてみましょう。

文字で美人になる*

B728-ナ 『美文字のすすめ』 中塚 翠涛 || 著 幻冬舎

パソコンや携帯電話、スマートフォンの普及に伴い、文字を書く機会が昔に比べ、少なくなってきました。想いというものは言葉だけではなく、文字からも伝わるものです。また、「文字は人を表す」と言われるように、人は文字からその人に対するイメージを湧かせたりします。そういった意味でも手書きの文字は大切にしたいものです。では、どんな文字を書けばいいのか。単に「綺麗な字」と言っても、それって一体どんな文字なのでしょう。そうした話からこの本は始まり、上手い下手ではなく、自分の個性を活かしつつ、想いのこもった美文字を書くコツを伝授してくれます。

文字にまつわる“いい話”からは手書きの文字がくれるあたたかさを感じ、「文字を書きたい！」という気持ちにさせられます。

振る舞いに現れる女性力

気遣い上手になるためには*

336-ミ 『「気遣い」のキホン』 三上 ナナエ || 著 すばる舎

ほんの少しの気遣いが相手の心に染み入って、良好な人間関係を築いていきます。そうした気遣いが自然とできるようになるにはどうしたらよいのでしょうか。この本ではそのヒントを元CAである著者の三上さんが教えてくれます。CA時代に培った気遣いの基本は、特別なスキルを必要とするものではなく、私たちにもできる本当に“ちょっとしたこと”ばかりです。読んでみると、気遣いとは、会話、表情、動作、装いなど、色々なところに現れるものということ、そして、自分自身が日々、たくさんの人から気遣いをもらっているのだということに気がつきます。

三上さんが本文の中で述べているように、周りを見渡して素敵な気遣いをしている人を見つけて、お手本にしながら、小さな気遣いを重ねていきましょう。

江戸から学ぶしぐさ*

385-コ 『「江戸しぐさ」完全理解』 越川 禮子 / 林田 明夫 || 著 三五館

互いに思いやり助け合い、一日一日を大切に、たった一度の人生を、気持ち良く楽しく暮らすためにはどうしたらいいのかを真剣に考え、行動した結果、生まれ広まったという“江戸しぐさ”。

どんなものが江戸しぐさと呼ばれるものなのかだけでなく、現代まで受け継がれてきたその江戸しぐさが生まれたきっかけとは何だったのかという部分に焦点を当て、詳しい解説がされています。また、そこからは江戸の人々の暮らしや時代の流れを知ることができます。

日本人が昔から大事にしてきた思いやりの心、それをしぐさとして表現した江戸しぐさ。意味のこもったしぐさだからこそ、相手に伝わる思いがあるのだと改めて感じさせられます。私たちもこの江戸しぐさを日々の生活に取り入れ、この先の未来へ伝えていけるようにしたいものです。

大切な場で困らないように*

596-ミ 『ドキドキするお食事のマナー』 水無瀬 広明 || 監修 小学館

これからみなさんもフォーマルな場で食事をする機会が増えていきます。おいしくいただくことが食事において一番大切なことですが、その上で出てきたお料理を綺麗に食べることができると、とても素敵ですね。そのために知っておくと、必ず役立つ食事のマナーを今から覚えておきましょう。

イタリアン、フレンチ、懐石、中華など、食事のシーンが変われば、マナーも様々。初めは「こんなにたくさん覚えることってあるんだ」と驚きもありますが、綺麗な食べ方を知っていくのがだんだんと楽しくなってきます。食べ方だけでなく、新たにお料理やソースの名前を覚えられるのもこの本のよいところです。

覚えたことは、早速、普段の食事から心がけて練習していきましょう。

✿お手本としたい女性たち✿

グローバルに生きる日本人女性*

289-オ『緒方貞子という生き方』 黒田 龍彦 || 著 KKベストセラーズ

日本にはこんなに素晴らしい女性がいることに感動を覚えます。その名前は緒方貞子。

国際基督教大学助教授、国連公使、国連特命全権公使、ユニセフ執行理事会議長、上智大学教授、国連人権委員会日本政府代表など、多くのキャリアを積み、63歳にして日本人女性初の国連難民高等弁務官に就任。その後の10年、徹底した現場主義を貫き、当事者たちの声に耳を傾け、紛争地域を歩き回った。その姿は世界から、小さな巨人、難民の母、ラスト・リゾート(最後の望み)と称賛を浴びました。そんなバリバリのキャリアウーマンでありながら、家庭を守ることを第一とし、「女性の人生は長いんだし、長いスパンで考えればいい」とフルタイムで働き始めたのは40歳を過ぎてから。仕事と家庭、その両立を見事なまでにやってのけた日本の誇るべき女性です。

エレガントに生きる*

B289.3-シ『ココ・シャネル 女を磨く言葉』 高野 てるみ || 著 PHP研究所

おしゃれに、恋に、仕事に、そのどれもエレガントにこなして生きたファッションデザイナー ココ・シャネル。彼女が成し遂げたのは、女性のライフスタイルを前向きにするためのファッションアイテムを次々に世へ送り出したということ、女性が仕事をもち、男性と対等に社会で働く先陣を切ったということです。働く女性の先駆者として、今日まで女性の尊敬と憧憬の対象になっているのは、そうした実績があるからです。

常にアンテナをはりめぐらせ、日常の生活や街の中から何かを学び取り、気づくことを心がけていたというココ・シャネルの姿勢は私たちも見習うべきところ。彼女の遺した言葉はこれから社会に出て活躍していくみなさんのよい刺激となることでしょう。

LEAN IN (一歩踏み出せ) *

366-サ『LEAN IN リーン・イン』 シェリル・サンドバーグ || 著 日本経済新聞出版社

日本でもお馴染みとなったフェイスブックの最高執行責任者を務めるシェリル・サンドバーグ。女性リーダーとして大企業で働く彼女が、今、女性が直面している様々な問題を明らかにし、自らの経験を元に同じ視線を持って私たち女性にできることを提唱しています。

読んでいて気がつくのは、働く女性を取り巻く環境は改善されてきているとはいえ、抱えている問題はまだまだなくなっていないということです。これからみなさんが社会に出ていった時にも、何らかの壁があることでしょう。その解決を誰かに任せろのではなく、この先、女性がより働きやすい環境を作っていくのは自分自身でもあるのだと自覚し、この本を考える材料としながら、どう働くか、何を指すか、どんな環境を理想とするのかをイメージしてみてください。

華やかさの陰にあったもの*

B778-ハ『オードリー・ヘップバーンという生き方』 山口 路子 || 著 新人物往来社

「永遠の妖精」と謳われ、世界中から愛された女優オードリー・ヘップバーン。『ローマの休日』、『ティファニーで朝食を』、『マイ・フェア・レディ』など、彼女の出演した映画もまた今なお色あせることなく、観続けられています。圧倒的な存在感を持ちながらも、謙虚で控えめ。周りへの感謝の気持ちを常に持った人。そんな魅力に溢れる憧れの女性。その人生は、どんなに華やかなものだったのだろうと思いつつページを開くと第1章の冒頭から衝撃的な言葉が待ち受けています。彼女の人生を追い、彼女の言葉に触れ、わかるのはオードリーが自身のつらい体験を糧に逆境に負けない強さや深い慈しみの心を培ってきたということです。ひとつひとつの言葉の重みが胸に突き刺さってきます。なぜ彼女が輝き続けるのか、その答えを見つけることができる1冊です。

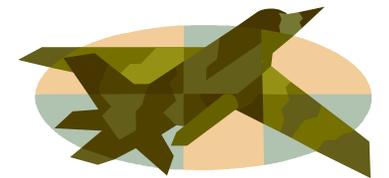


図書館司書の「今月はこの本を読みました」

今月は森博嗣さんの『スカイ・クロラ』(913.6-モ 中央公論新社)を読みました。本の装丁が綺麗でずっと気になっていた本です。

戦闘機のパイロットとして、闘い生きるカンナミ ユーヒチ。彼が新しい勤務地に所属されたところから始まり、彼のパイロットとしての日常が描かれています。読んでみるとわかりますが、物語はかなり淡々と進んでいきます。主人公でありながら実体が見えてこないユーヒチ、何度も出てくる“キルドレ”というフレーズ、何か深い過去を持っていそうな上司の草薙水素(クサナギ スイト)。気になるところはたくさんあるのに、どれも明らかにならない。読み終わっても本当に終わったのかなという気持ちが残りました。

実はこの『スカイ・クロラ』はシリーズもので刊行順では1番最初でありながら、時系列順では1番最後の部分になるのだそう。(なるほど!) シリーズ全てを読んで初めてこの『スカイ・クロラ』の意味するところがわかりそうです。次は『ナ・バ・テア』を読みます。 【今井】



今月は“上橋菜穂子”祭りでした。小さなノーベル賞ともいわれる国際アンデルセン賞を今年3月に受賞した上橋さんの最新のエッセー『明日は、いずこの空の下』(914.6-ウ 講談社)と小説『鹿の王上・下』(913.6-ウ KADOKAWA)とを立て続けに読みました。取材で応急手当の方法について医師に質問する上橋さんの姿をドキュメンタリー番組で見たのですが、予想通り小説の方にそんなシーンがあるではないですか。ワクワクと変なところでテンションが上がってしまったのですが、それ以上にテンションが上がったのが、エッセーです。17歳の夏から現在まで世界各地を巡った旅の思い出話なのですが、なんと『イギリスは愉快だ』の林望氏が下宿するより4年も前に『グリーン・ノウの子どもたち』の作者ルーシー・M・ボストンさんのマナーハウスを高校生だった上橋さんが訪ねていたのです。物語にでてくるイチイの緑の鹿や19世紀の木馬を見、そして壁に刻まれたルーン文字に時代と人々の暮らしを感じ、ファンタジーの生まれ方を覚ります。日本的なファンタジーの上橋さんの源流がイギリスにあったとは。 【鈴木】